

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒190-0013
東京都立川市富士見町2-12-13 安藤ビルB1F
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

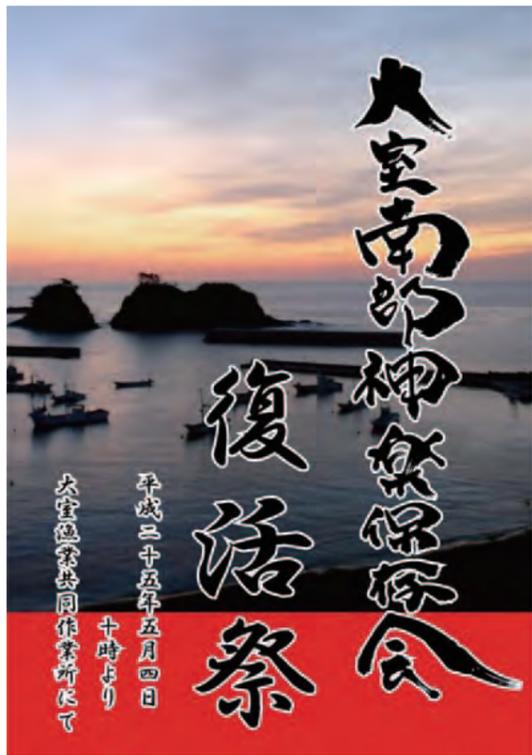
2013年(平成25年)2月16日 土曜日

無料

第9号

毎月発行

創刊2013年(平成25年)2月16日 土曜日



大室南部神楽復活ポスター



雄勝法印神楽



雄勝法印神楽

当新聞応援・支援活動が活発化、話題呼ぶ

大室南部神楽
5/4 復活祭決定
(石巻市十三浜)

雄勝法印神楽
2月2日公演
(宮城県雄勝町)

60年ぶりの獅子舞復活
目指し有志が立ち上がる
(石巻市桃浦)

当新聞は多くの復興活動の連携の場を指す

当新聞は、東北復興に関するさまざまなメッセージを発信することも重要な目的だが、もうひとつ別の目的も持っている。

それは、東北復興を目指すさまざまな個人、組織、機関との連携を図っていくことである。復興は、多くの活動がバラバラに林立するだけでは効率が良いとは言えないし、相乗効果を産むこともない。相互に連携して、かつ激励しあいながら復興活動を推進していくば想像以上の効果を産むに違いない。そのため、当新聞そのものが、さまざまな活動が連携を模索する場にもなりたいと願っている。具体的には、積極的にさまざまな復興活動を新聞

当新聞の応援・支援している活動紹介

で取り上げてPRすることで、活動相互間の情報交換を促したり、あるいは紙面を通じてではなく、直接に連携プロジェクト等を設置して諸活動を連結していくことを目指したいと思っている。

また、大震災から二年を迎えようとしている現在では、復興に必要なのは、行政の支援や義援金だけではない。何よりも自力で復興しようという前向きな姿勢が第一であり、他方、精神的な支えも必要である。そうしたことがあってはじめて頑張れるのだと考える。そうした取り組み姿勢は、自らの踏ん張りから湧き出ることもあるだろうが、他の個人や団体の活動から励まされることも多いはずである。

これまで当新聞が取り上げさせていた活動のなかで特に注目すべきは、三陸沿岸部被災地の復興を目指そうという郷土芸能復興グループの活動である。震災で途絶えていたが、いちは長年途絶えていたが、震災を機に復活させようという目的の活動である。それは、被災でバラバラになった住民をつなぎ戻す役割と地域の再興が一体となった活動でもある。そうした活動の一端を紹介したい。

今回は、宮城県の三陸沿岸部の津波被災地を中心に、そこで地域・集落を再興しようと奮闘する郷土芸能の三グループである。

この大震災では、集落に五二軒あった家のうち、実に五〇軒が流され、神楽の師匠をはじめとして多くの方々が亡くなられた。同時に、神楽に不可欠な道具もみな流された。

神楽復活にあたっては、まず神楽のお面、衣装その他を調達しなければならぬが、大分ご苦労されたようだ。幸いさまざまな機関からの支援も受けられ、義援金も集まり、お面の復元にあたっては多くの方々のご支援、サポートがあったという。

しかし、もう手元にはないお面の復元には大分ご苦労された。何しろお面の図面などは最初からない。おらほの神楽を復活させようじゃないかと力強く復活の決意表明をしていた。これが今年実現の運びとなった。大いに喜ぶべきことである。

また、衣装は手作りであり、高齢のご婦人がせっせと作られていたようだが、途中、あまりの仕事の多さに外部ボランティアの手助けもあったようだ。何とか復活祭には間に合いそうだとのことである。

こうした状況からの復活である。神楽関係者の皆さんはいまでも不自由な生活をされておられるが、この神楽復活に、あちこちに避難されている元住民の団結と集落の復活をも賭けておられることと思う。

こんな状況のなかでの復活だが、現場の雰囲気は明るい。むしろ明るすぎるといふべきか。もともと南部神楽には激しい舞があるが、練習再開後しばらくは、厳しいトレーニングで足腰立たなくなるほどになったという。しかし、いつも練習場は笑い声が絶えないというし、筋肉痛で歩く姿がごちないとおどけた模様を伝えてくる。もっと知りたい方はぜひHPをご覧ください。

いま五月四日の復活祭を目指して猛練習中とのことである。しかし、練習一本に集中しているため、地元十三浜での会場設営とか、駐車場確保とか、観客を収容するための施設の手配・準備とかに手が回らない。もし、ボランティアでこうした手伝いをしたいという方がおられれば、ぜひHPを通じて問い合わせみてはいかがであろう。きっと大歓迎されること間違いない。当然、筆者も応援に駆けつける予定だ。

次は、雄勝法印神楽である。この神楽は当新聞第五号(平成二十四年一月十六日発行)バックナンバー(参照)で紹介した。筆者が取材したのは鎌倉であった。

鎌倉と雄勝地区のある石巻市は後醍醐天皇の皇子である護良親王の伝説によるご縁があり、二年連続での開催であった。

この神楽発祥の地である宮城県石巻市雄勝地区も今般の大震災では甚大な津波被害を受けた。震災直後の映像では、沿岸部には何も残っていない。また、この地域は、「雄勝硯」でも有名な地域であったが、産業としての「雄勝硯」はほぼ全滅となった。硯と同じ素材の「雄勝スレート」は東京駅舎復元で使用され、復興のシンボルとして話題となり有名になったが、ぜひ硯の復活も期待したい。

この「雄勝硯」も当新聞第七号(平成二十四年十二月十六日発行)バックナンバー(参照)で紹介した。

この法印神楽は、室町時代からの六百年以上もの歴史を持つ国指定重要無形民俗文化財に指定されている由緒ある神楽で

ある。「法印」とは山伏修験者のことであり、出羽三山の羽黒山系の山伏修験者が伝えたと言われている。

関係者の方々は、今年の大震災被災で途方に暮れつつも、自分たちの世代で歴史ある神楽を途絶えさせてはならないと大変な思いをして復活させたのである。なかでも、震災当時の保存会の会長は、妻と娘さんとともに津波の犠牲者となったが、そうした事情も乗り越えての復活であった。

大震災からもうすぐ二年を迎えようとしているが、いまだに不自由な生活を余儀なくされているに違いない。それでもこの神楽の公演を実施する意気込みには圧倒される。そうした思いが自然に伝わるのか、この神楽公演はあちこちで好評のようで、毎回会場が観客でいっぱいになるという。

この神楽が、二月二日の



2012年の桃浦夏祭りでの獅子舞

国立劇場(東京・千代田区)で、平成二五年二月民俗芸能公演「東北の芸能II「宮城」として公演を行った。三年前も同じ場所で行った。三年前も同じ場所で行った。三年前も同じ場所で行った。

この日は、ちようど皇太子ご夫妻が来場され、最後までご覧されたという。筆者も当初は見に行き予定であったが、よんどころない所要のため行けなかった。まことに残念であった。

筆者は、この神楽の復活にはとりわけ思い入れが強い。この神楽復活に筆者の同級生が関わっているためである。

60年ぶりの獅子舞復活目指し有志立ち上げる — 桃浦獅子舞 —

牡鹿半島・桃浦地区の「夏祭り再興プロジェクト」

この地区は、大震災前は、一六〇人ほどの住民がいた。それが震災後には、三世帯四人に大きく減少した。多くの犠牲者が出たことと津波による住宅被災で元の家に住めないため、遠くの仮設住宅等で避難生活を送っているためである。

津波でこの神社にあった獅子頭が流された。しかし奇跡的に発見され、桃浦に戻ってきた。桃浦地区の獅子舞は六〇年間もの間途絶えていたが、この獅子頭発見で、自然な成り行きとして、獅子舞の復活をしようということになった。そして、昨年の夏祭りに獅子頭をきれいにし、長い胴幕もつけて皆で踊ったという。しかし、そのときは太鼓も笛もなかった。

それで今度は太鼓も笛も揃え、本格的な獅子舞にしようという話が出た。これも当然の成り行きである。

とはいえ、太鼓や笛を購入する資金もないし、太鼓のたたき手、笛の吹き手もない。何しろ、この地区にはたった四人の定住者しかいないのだ。第一、六〇年間途絶えていた獅子舞がどのようなものであったかを思い出す

ところからのスタートとなるのだ。桃浦の夏祭りを企画した大島氏もさすがに困った。

筆者も、当新聞発行以来、さまざまな郷土芸能関係者と知遇を得てきた。そこで、何かの手助けになるかもしれないと、とりあえず、獅子舞に詳しい人、興味ある人に集まってもらうことにした。

その場で、獅子舞復活にはどういったことが必要か、揃えるものはどうするか、資金はどうするか、獅子舞に詳しい人に復活に向けて何か参考になることを聞き出せないか、笛の吹き手や太鼓のたたき手をどうやって発掘するか、獅子舞の囃子はどのようなものなのか、太鼓はどんなリズムなのか、その他さまざまなアドバイスはないかなどを引き出した。この獅子舞復活に弾みがつくのではないかと考えたのだ。

そんな経緯で開催した初会合は筆者の予想をはるかに越え、どんどんアイデアが飛び出す。すぐにも獅子舞復活プロジェクトを結成し、即座に動き出そうという勢いがあった。

とはいえ、桃浦に定住する四人の方々の意向を確認しなければならぬ。近いうちに、有志で桃浦を訪問しようということになった。大きな前進である。

三陸の特産物、特に水産資源は、国内外でその価値に比べてあまり評価が高くないといえなくも思っている。復興を機に、三陸の特産物の評価向上も狙い、同時に知名度向上から販売拡大にもつなげるPR活動に少しでも貢献して行こうと考えていた。その突破口企画として、三陸の牡蠣と日本酒を考えた次第である。

三陸特産物復興支援企画第一弾
トライアル始動

【三陸産牡蠣と日本酒の会】
の企画準備開始

当新聞の東北復興支援活動は、前述の郷土芸能復興活動への応援・支援だけではなく、三陸の特産物の復興支援活動もターゲットである。

そのなかでも特に、三陸産の牡蠣と三陸産の日本酒を組み合わせ、双方を同時に復興させるという目玉企画を以前から考えていた。

三陸の特産物、特に水産資源は、国内外でその価値に比べてあまり評価が高くないといえなくも思っている。復興を機に、三陸の特産物の評価向上も狙い、同時に知名度向上から販売拡大にもつなげるPR活動に少しでも貢献して行こうと考えていた。その突破口企画として、三陸の牡蠣と日本酒を考えた次第である。

以前から、同じ土地で採れた牡蠣と日本酒の組合せは最高だと何度も聞いていた。それを三陸内部のうまいもの情報にとどめて置くのではなく、三陸の名産として広く国内外の消費者に提供する。それも単なる復興事業ということではなく、今後継続・発展するビジネスとしても確立することには貢献は出来ないかと考えてきた。

昨年、試しに、三陸産ではなかったが、牡蠣と日本酒を合わせてみた。確かに合う。それでなおさら、三陸の牡蠣と日本酒の組合せに思いが募っていく。しかし筆者は水産業にも、日本酒業界にもまったくの門外漢、素人である。三陸の牡蠣は知っているが、単なる一消費者としてのことであり、三陸の日本酒も同様である。企画は実行したいが、ノウハウゼロ、牡蠣と日本酒をつなぐ協力者もなかなか現れない。そんな状況がずっと続いていた。

しかも、筆者の思いつきを構想具体化前に関係者に口走ってしまっている。一度口に出したら、引き下がることはできない。何とかしなくてはならない。でも何ともできない。それでも自力で何とか打開してみようと考えた。

まずは、日本酒の勉強会に参加した。ただ飲むだけではいけない。少なくとも日本酒がどうやって造られるのかの最小限の知識だけはカバーしておく必要がある。吟醸も純米も区別がつかず、ただうまい、まずいでは仕方がない。それで、関東のとある酒造メーカーの利き酒会に参加した。

しかし、大量の利き酒を飲んでしまった頭からはせつかく得た知識がどんどん流れ出してしまう。唯一

覚えていたのは、海産物には辛口の純米系の日本酒ということぐらい。もつと勉強しなければならぬ。

あきらめかけていたところに突然の援軍が現れた。聞けば、石巻の水産復興を支援している団体であるという。しかも、お互いのネットワークには双方の知り合いもたくさんいる。

話ほとんどん拍子に進み、牡蠣シーズンもそろそろ終わるが、そのラストチャンスとして、また次シーズンの本格的な取り組みへのトライアルケースとしてチャレンジしてみようということに話まとまった。

牡蠣も日本酒も石巻産で統一し、同一地域の産物同士の組み合わせがどれほどになるのかも試してみようということになった。

実際のトライアルは三月中に行き予定として準備を進めることとした。紆余曲折はあるだろうが、開催にこぎつけたときには次号(第一〇号)でご報告する。

トライアルではきつとさまざまな意見が飛び出すだろう。アドバイスや本格事業展開のためのアイデアも期待したいところだ。

写真は、石巻の海産物復興に尽力するボランティア団体「石巻復興プロジェクト」の大田区大森ウイロード山王商店街での活動の様子である。ここではさまざまなボランティア団体が活発に交流していた。

写真は、石巻の海産物復興に尽力するボランティア団体「石巻復興プロジェクト」の大田区大森ウイロード山王商店街での活動の様子である。ここではさまざまなボランティア団体が活発に交流していた。



蝦夷の統領伝説 赤頭高丸と悪路王

みちのくの名刹『篁峯寺』
と日本初の金産出



無夷山篁峯寺観音堂

資料が残されていない理由について

勝者の側による歴史改ざんはたいへいの場合、自分の側に有利に「事実」をねじ曲げ、不都合な部分は切り捨てる。逆に、敗者の側の記録は跡形もなく抹消される。記録があつたとしても誹謗中傷の類である。こうしたことはいつの時代にも、どこにおいても繰り返

返され、歴史の真実を追究しようとする際に大きな障害となる。

それにしても、そのような歴史記録抹消によるものなのか、あるいはもともと記録そのものが少ないのか、それとも、古代東北に関する文献記述はあまりにも少なすぎで、尋常なレベルではないと感じる。

近年ようやく古代東北の英雄に戻ったアテルイ(阿弭流為)やモレ(母礼)の扱いがまさにそうである。中央政権からの彼らに対する恨みつらみがありにも強かつたために記録が少なくないのであるか。または、アテルイやモレの残された同胞や子孫が資料を残そうとしなかつたのであろうか。

朝廷による侵略戦争

もともと奈良時代末期から平安初期にかけての東

北での戦争は朝廷側が仕掛けた侵略戦争であつたと言える。百歩譲つても、蝦夷(えみし)側から仕掛けた戦争でないことははっきりしている。しかし、蝦夷が朝廷の支配に従わないから征伐するなどという単純な理由で仕掛けた訳ではない。幾重にも絡み合った複合的な理由があつたはずである。それゆえ、度重なる侵略戦争を仕掛け、多くの犠牲者を出しながらも、ようやくのことで大和朝廷は蝦夷との戦いによりやうく勝利し、東北の支配にこぎつ

けたのだ。何が何でも、どんな手段を用いても、屈服させなければならなかつたというのが真相であろう。この戦争に勝たなければ国家の屋台骨が揺らぐというほどの戦いであつたはずだ。

謀報戦略も古代からあつたのだらう。戦う相手

徹底的に誹謗中傷し、あわよくば内部分裂させ、周囲の協力者との分断を図ろうとする。こうした謀報戦略の一部が後々まで残つたのかもしれないし、二度と同様の蝦夷のリーダーが現れないようにわざと残したのかもしれない。

非道かつ野蛮で未開人という蝦夷イメージ

いまでも残る誹謗中傷はつぎのようなものである。アテルイやモレは地元



雪が積もった山門



山門内の仁王像

の善良な民衆に危害を加え、婦女子を誘拐するなど悪逆非道の集団の頭領であり、そのため征伐に向かつたのだと。身近にいる人間、東北の住人ならば、これがうそと分かつてても、当時の都びとや東北以外の人間はすぐに信じたかもしれない。何せ蝦夷とは蝦夷地(えぞち)に住む非文明人であり野蛮な人間というイメージがこびりついていたのであろうから。

しかし、勝者側の歴史改ざんや誹報活動にもかかわらず、地元に残る伝説や消去し忘れた文献のわずかな切れ端から、歴史の真実が立ち現れることもある。こうしたことから、つい最近になってアテルイやモレの見直しが実現した。それに続いて、アテルイやモレと同一人物かあるいは別人かもしれない古代東北のリーダー伝説もあることが分かつてきている。

いわく「赤頭」、「高丸」、「悪路王」、「大嶽丸」などである。アテルイやモレと同一人物であるとの見解も見られるが、長い戦いをアテルイとモレのたつた二人のリーダーで戦つた訳でもあるまいし、名前も埋もれてしまつた多くのリーダーがいたはずだ。真実はこれからの古代東北の研究を待つしかない。

アテルイとモレが坂上田村麻呂に敗れた伝説については、ユネスコ世界遺産に登録された平泉町内にある達谷窟(たつこく)のいわや)の話が有名である。『中尊寺西光院の毘沙門堂縁起』の記述にはこうある。

およそ一二〇〇年の昔、悪路王・赤頭・高丸らの蝦夷がこの窟に塞を構え、良民を苦しめ、女子供を掠める等の乱暴な振舞い多く、国府もこれを抑える事が出来な

そこで、人皇五十代桓武天皇は坂上田村麻呂公を征夷大將軍に命じ、蝦夷征

伐の勅を下された。対する悪路王等は達谷窟より三千余の賊徒を率い駿河国清見関まで進んだが、大將軍が京を發する報を聞くと、武威を恐れ窟に引き返し守りを固めた。

延暦二〇年(八〇一)、大將軍は窟(達谷窟)に籠る蝦夷を激戦の末に打ち破り、悪路王・赤頭・高丸の首を刎ね、遂に蝦夷を平定した。

これと同じような伝説はあちこちにある。今回は、宮城県北部の遠田郡涌谷町篁岳(のだけ)にある篁峯寺(こんぼうじ)・宝亀元年七七〇年創建とも大同二年八〇七年創建とも言われている)の伝説を取り上げる。その伝説は次の通りである。(涌谷町史より)

田村麻呂英雄伝説

また、ここには坂上田村麻呂の千年供養碑もある。さらには、この地域一帯は「神楽岡」といい、田村麻呂が戦勝報告に際し、山内の白山堂の前で神楽の舞を奉納したことが起源の地名だといひ伝えもある。

この伝説には妙にリアル感がある。ひとつは、この観音堂の床下は今でも中高である。何かが埋まつているのはほぼ間違いない。さらに、首だけを京の都に送り、胴はここに埋めたといふことと、最後は、観音堂の柱の長さの違いのことまで話が細部にわたつてい

おまけに、嘉永年間に再建する際に、柱の長さを揃えようと地ならしをして建設しようとしたら、けが人が続出したので、やむを得ずもとの形に戻して再建したという怖いたり的な逸話まで伝わっている。

それはともかく、歴史記述がない、何も知らされていなく、教育されてこなかつたとはいへ、かつて郷土のために戦つたであらう



はるか奥羽山脈まで見渡せる



推定樹齡 900 年の夫婦杉

はずの蝦夷たちを打ち負かした侵略者である坂上田村麻呂だけを賞賛するというのは、東北に縁のあるものとしては非常に複雑な思いがする。その思いはおそらく筆者だけではないはずだ。

東北は被支配者側であるから、支配者側である大和朝廷に気を使うのは分かるが、せめて、ここでかつて大和朝廷軍と戦った蝦夷がいて、ここで敗れ埋葬されたとか、赤頭高丸や悪路王の由縁を述べた碑があつてもいいようなものである。

たたら製鉄跡

それから、この篔岳には田村麻呂伝説、赤頭高丸、悪路王伝説以外に、歴史的に興味深いところが多々存在する。

まずは、この近辺に古代のたたら製鉄の痕跡があることだ。これは地名にもあり「陀々羅岡(だたらお



田村麻呂が鎬矢を突き刺したら枝葉が生じたという伝説の場所



坂上田村麻呂一千年供養碑

か)というところが篔塚寺のすぐ近くにある。「たたら」↓「だたら」は地名の変形としては最小範囲であり、ほぼ間違いのないだろう。しかし、このことはあまり驚くにあたらない。たたら製鉄は宮城県北部各地にたくさんあつたようだ。それは地名からも確認できる。そのうちのひとつがこの篔岳であつたというにすぎない。はじめて耳にする人は驚くかもしれないが、事実である。

日本初の金の産出

さらに有名なのは日本初の金産出の話である。これは歴史書にも出てくるが、この篔岳近辺で日本初の金の産出があつたのだ。

西暦七四〇年代、聖武天皇は奈良の東大寺大仏塗金のための金を切望していた。当時は日本国内では金が採れないとされ、すべて輸入に頼っていた。

まさにこのとき、天平二一年(七四九年)に陸奥国守百済王敬福(くだらこにきしけいふく)が、ここで産出した黄金九〇〇両(約十三kg)を献上したのだ。聖武天皇は金獲得のための遣唐使の派遣も検討していたが、金産出の話聞き、狂喜したと伝えられている。

この百済王敬福は、名前の通り、百済人の子孫であり、渡来人である。西暦六六三年の白村江(はくすきのえ)の戦いで日本と百済連合軍は唐・新羅軍に破れたが、その際に日本に亡命した百済王族の子孫であつた。しかし、この金産出で聖武天皇の覚えめでたく、とんとん拍子に出世している。

この金産出にあつては、敬福の配下に百済国伝来の高度な金採取に詳しい人物や鉱山師がいたのではないかと言われている。近くの黄金山神社近くの天平ロマン館には、近年に作ら



黄金山神社



産金遺跡予想図



天平ろまん館



百済人望郷の碑

れた百済人の望郷の碑もある。さらに興味深いことに、この敬福の同族からは、坂上田村麻呂配下の征夷副将軍、百済王教雲を輩出している。

この土地が金を産み、そして金産出の主役であつた人間の同族がこの地を征服したのだ。まさに歴史の皮肉と言ふべきではない。また、この篔岳の金産出物語はこれで終わらず、平泉の黄金文化に連なっていく。

ここから近い涌谷町浦

古代東北研究は必ず東北復興に結びつく

これまでは、古代東北という、未開な縄文人が毛皮で出来た服を身にまと

いた社会というイメージがつきまとうが、実体は大きく異なるものであることは確かだ。

むしろ、朝鮮半島をはじめとする東アジアの国際情勢と連動した地域であり、異国人もいたのだ。

さらには、大和朝廷の支配が徐々に確立していく時代でもあつた。この篔岳を含む宮城県北部は、大和朝廷と蝦夷の対立の最前線でもあつた。さまざまな利害の対立、多くのいさかいがあつたはずだ。

加えて、ここには関東

谷に黄金山神社がある。金の産出を記念して神社が建立されたのだ。この説明看板には、間違いなく篔岳山麓で取れた金と記されている。

さらには倭囚という、この地からの強制移住を余儀なくされた人々もいた。そうした人々が入り乱れていた地域でもあつた。

また、金や鉄を産出する、いわば当時の最先端工業地域でもあつたのだ。きつと大和朝廷だけでなく、多くの人間が、金や鉄、及びそれらに伴う富を求めてやってきたことだろう。

工業だけでなく、たたら製鉄によって産み出される鉄製の農具の使用による農業の革新にも挑戦していたはずである。

いずれにしても、東北の考古学はいつぞやの石器捏造事件以来、あまり画期的な発見が聞かれない。古代東北の研究も同様に活発だといううわさも聞こえてこない。

朝廷側にねじ曲げられた歴史をうのみにせず、古代東北ひいては古代日本の

発掘研究と真実探求に努力すべきであり、その探求のしつこさが東北復興につながると思う。

数多くの敗戦を乗り越えて

東北は何度も大きな戦いに敗れてきた。近くは、江戸末期の戊辰戦争であり、その厳しい制裁はいまも続いているといつても過言ではない。伊達政宗も天下統一どころか、東北の統一さえ出来なかつた。一時は東北の一大帝国となつた平泉のあつけない敗戦もあつた。安倍

氏の戦いもあつた。アテルイやモレの戦いも善戦はしたが、結局は敗れた。この約千二百年間にあま

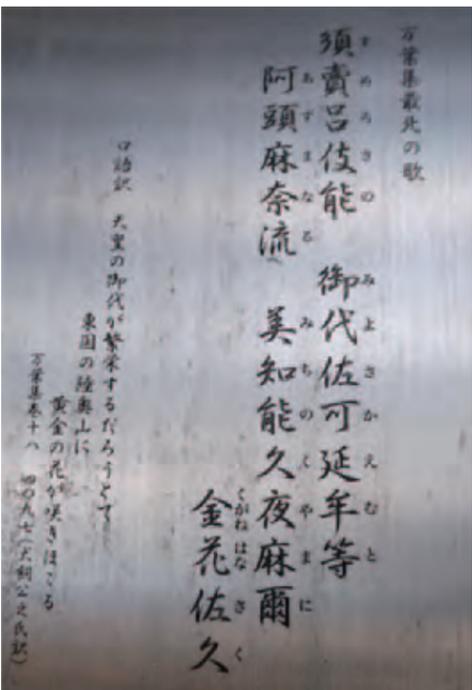
りにも負け続けて、自尊心まで失

つていないかと危惧する。いつしか、支配者側の意向を淡々と受け入れる、陰で文句は言うが表立って言わない、結果、何でも国の側の言いなりになる姿勢が身につけてはいないかと心配だ。

復興はお金の問題だけではない。むしろこうした精神性の問題が大きい。

今年(2013年)は古事記編纂一三〇〇年の節目の年でもあるという。この流れに沿って、一方的に古事記やその他の記述をうのみにするのはなく、支配者側の編纂した意図やその他の文献の裏側を研究するという試みがあつても良いと思うのだ。

だからこそ、東北歴史研究が求められていると思う。先人の意気、プライド、先進性、チャレンジ精神を信じられなければ、そして、



万葉集最北の歌

幸福はどこにあるのか

都道府県別の「幸福度」

昨年十二月、「日本いい県 都道府県別幸福度ランキング」(寺島実郎監修、東洋経済新報社)が刊行された。同書では、全国の都道府県について、幸福度に関係すると考えられる五五の指標から分析し、ランキング化を試みている。

総合ランキングで第一位となったのは長野県である。続く第二位が東京都

第三位が福井県となった。ちなみに、東北圏では秋田県が第二位、山形県が第三位、新潟県が第三位、福井県が第三位、宮城県が第四位、青森県が第四位という結果であった。全体的に見て、このランキングでは、東北各県が中位以下に位置していることが分

かる。

同種のランク付けが行われたのは今回が初めてではない。法政大学教授の坂本光司氏も二〇一一年に四七都道府県幸福度ランキングを発表している。こちらは「地域住民の幸福度を端的に示していると思われる四〇〇の指標」でランキングしている。このランキングでは第一位が福井県、第二位が富山県、第三位が石川県と、北陸三県がベスト三を占めた。

今回のランキングで第三位の福井県が坂本氏のランキングでも第一位になっているわけだが、今回第一位の長野県はここでは第七位、第二位の東京都はなんと第三八位である。わずか一年でこれら都道府県を取り巻く環境が大きく変わったとは考えられないので、幸福度はどういった指標に基いてどういった重み付け

で判定するかによって、結果が大きく変わるといことが見て取れる。

個別にランキングを見てみると、東北各県の現状が浮き彫りになる。ただそれは幸福度というよりも、今後の地域づくりこそより活かせそうな内容である。東北圏の各県が一位になった指標について見てみると、「基本健康診査受診率」で宮城県、「余暇時間」で新潟県、「正規雇用者比率」で山形県、「持ち家比率」で秋田県、「待機児童率」で青森県、「一人暮らし高齢者率」で山形県、「学力」で秋田県、「不登校児童生徒率」で岩手県、「余裕教室活用率」で秋田県

青森県、新潟県がそれぞれ全国一位となっている。基本指標(人口増加率、一人あたり県民所得、選挙投票率、食料自給率、財政健全度)と五分野(健康分野、文化分野、仕事分野、生活分野、教育分野)別に見てみると、秋田県が教育分野で二位、新潟県が生活分野で八位、宮城県が健康分野で八位にランクインしている。

こうしたランキングでよく起こりがちなこととして、そのランク付けがされた判断基準やプロセスが顧みられずに、ランキングそのものだけが話題になるということがある。実際、今回のランキングでも、「〇〇県にいる人は幸せ」とか「××県の人は不幸せ」といった公表されたランキングだけ取り上げた議論がネット上でも出ているが、何が幸福を規定するのか、あるいは、何が幸福を実感することに大きく貢献するのか、ということを考えることは、大変難しいことである。

今回のランキングは「人間の幸福度に関連する度合いが高いと判断して抽出した」指標に基いて分析がなされているが、それがすなわちその都道府県に実際に住む人々の幸福感につながるという証明がなされていない。書籍の中でも「今回は除外したが、幸福の基本要素である本人の自己意識という主観的な要因については、来年度以降のランキング解析における課題」として「断りを入れられてはいるが、そもそも幸福とは主観的なものである。何を以て幸福とするかも、人によって様々である。」

この「本人の自己意識」に、地域によってどれだけ差があるのか、すなわち都道府県によって「自分は幸

福である」と感じている人の割合に差があるのかについても調査を進め、その結果と今回のランク付けに使用した五五の指標それぞれとの関連について照合してみれば、あるいは多くの人が幸福と感じることと関連の深い指標が見つかるかもしれない。

「体感温度」という言葉がある。肌で感じる温度のことだが、同じ気温であっても肌を感じる温度は日差の有無、風の強弱、湿度の高低によって一定ではない。日差しがあると暖かく感じ、風が強いと寒く感じるといことはよくある。具体的には、風速1m/秒につき体感温度はおよそ一度ずつ下がるそうである。

幸福度を図る五五の指標について充足していれば、より幸福を感じやすい傾向があるといことは言えるかもしれない。しかし、実際に幸福を「体感」できるかどうかは、そこに住む人次第である。その人の心に日差しがあれば幸福と感じるかもしれないし、心に北風が吹いている状態では幸福を感じ取れないかもしれない。幸福度を図る指標とそこに住む人が実際に幸福と感じているかどうかは、気温と体感温度の関係に似ているように思うのである。

「気温」と「体感温度」

しかし、果たしてこれらの指標が満たされていれば、そこに住む住民は即幸福と言えるものであろうか。肝心なのは、そこに住む住民が、幸福と感じられているかどうかではないだ

ろうか。



大友浩平氏

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ohtani

執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagama5/

http://blog.livedoor.jp/anagama5/

一昨年、ブータン王国の国王夫妻が来日し、被災地を訪問し、国会でも演説を行った。国会での演説、被災地での子どもたちとの対話、いずれもこの若き国王の一方ならぬ徳を映し出していたように思う。ブータンと言えば、国民総幸福量というGDPに代わる尺度をつくり、経済成長のみに拠らない国家運営を志向していることで知られる。ブータン国民の幸福度は日本国民のそれよりもはるかに高いそうで、「国民の九七%が『幸福』と答えている」と報じられていた。

世界第三位のGDPを誇るこの国で、毎年三万人前後の人が自ら命を絶っているという事実、それにはもちろん様々な要因があるのだから、その大きな一つは幸福が実感できないということにあるのではないかと推測される。これまでの日本は経済成長によってGDPが拡大すれば生活も豊かになる、生活が豊かになれば幸福になる、と考えてきたが、現状を鑑みるとどうやらそうではないのでは

ないか、ということが特に震災以降、よく取り沙汰されるようになった。

ブータン国王夫妻の来日により、改めてブータンのこのアプローチにも注目が集まったが、実はわが国でも内閣府に「幸福度に関する研究会」が設置されて、昨年「第一回生活の質に関する調査」が大々的に実施

された。この調査では「主観的幸福度」についても調べている。〇点を「とても不幸せ」、一〇点を「とても幸せ」として「現在の幸福感」について調査しているが、訪問留置による調査で平均六、六、インターネッ

トによる調査で平均六、一という結果が出ている。ちなみに、「ブータン国民の九七%が『幸福』と答えた」のは、同国の二〇〇五年の国勢調査だが、この時の設問に対する回答の選択肢は「非常に幸福」、「幸福」、「非常に不幸でない」の三つで、この「非常に幸福」と「幸福」と答えた人の割合の合計が約九七%であったということである。その後、二〇一〇年にブータン国内の研究所が行った調査は、内閣府の調査と同様、一〇段階で幸福度を尋ねるものだったが、その結果、ブータン国民の幸福度の平均は六、一だったそうである。日本も幸福度についてはもう少し自信を持つてよいのではないだろうか。

「幸福」と「弥勒菩薩」と「極楽浄土」

幸福度を測るのが難しい理由の一つは、幸福ということの定義が定まっていな

いことにもよると思う。幸福の定義というものは、それこそ人の数だけあるように思う。例えば、私が「幸福とは？」と聞かれたら、

「今、自分が置かれている状態のこと」と答える。どんなに辛い状況のように思えても、その中でも「幸福」であることを感じることが可能だと考えているからである。しかし、もちろんそれは私の考えであって、百人いれば百人違う考えがあるに違いない。

弥勒菩薩という仏がいる。釈尊の入滅後五六億七千万年後にこの世に現れ、一切衆生を救済するといふ。なぜそのような遥か遠い先の未来にならなく救いの手は現れないのだろうか。救いの手はそれくらい気が遠くなるような時間を待たないと差し伸べられない、言ってみれば出現する可能性の極めて低いものだとすることを、この弥勒菩薩の伝承は言わんとしているのだろうか。

単なる個人の解釈だが、「弥勒菩薩」は実在が、既にこの世に現れて一切衆生を救済したことになるのではないだろうか。「救済」されてもそのことに気づかない人はまったく気づかない。ちょうど、我々の目に最も近いところにあるまつ毛が、我々の目に最も見えにくいのと

同じように。その、あまりに近くて遠い隔たりを「五六億七千万年後」という遙か見えないくらい先の未来という形で表現したのが弥勒菩薩に関する伝承なのではないか、などと考えるのである。

「幸福」と捉えるとよりイメージがしやすいと思う。幸福は追い求め続けなければ得られないものではなく、実は今すぐそこ、目の前にあるのだと私は思っている。ただ、それは私の考えであって、そうでない捉え方ももちろんある。

極楽浄土についても、私の解釈は同様である。西方十萬億土の仏土を隔てた遙か彼方に、阿彌陀如来のいる極楽浄土は存在するといふ。そのような途方もない距離であるとすれば、極楽浄土とは何と遠いことかと思ふ。しかし、それもまた今ここにあるのに気づかない、そのあまりに遠い心理的距離をどのように表現しているのだとすれば、まったくその意味合いは変わってくる。

そのような観点から、以前書いたが、平泉の文化遺産の意味は、浄土をこの世に創り出すことであつたのだと私は考えている。単に、平泉の地に「浄土のテーマパーク」のようなものを作つて浄土のイメージを見せるといふことではなく、「この世こそが浄土である」ということを誰の目にも分かる形で示すことが目的だったのだということである。そしてそれは取りも直さず、この地に住む人の「幸福度」を高めようとした藤原清衡の施策の一つだったのではないかと私は考えるのである。

「幸福」と捉えるとよりイメージがしやすいと思う。幸福は追い求め続けなければ得られないものではなく、実は今すぐそこ、目の前にあるのだと私は思っている。ただ、それは私の考えであって、そうでない捉え方ももちろんある。

『東北よ 東京を削り取ってゆけ』

この新年も正月休みが終わり、私は帰省していた庄内から、高速バスで幾重もの雪山を越え仙台へ「戻って」くる。仙台に到着し寒

空の下のバス停に降りると、思い出すのは二年足らず前、この地に激震と津波、そして放射能災害がもたらされ、山形行きのバスで避難するため、停留所内長蛇の列に立った日の事だ。東北他県の原子力施設に勤務する友人から、仲間内へ悲痛なメールが発信されていた。「最悪の事態に向かっているように思われる・・・」仙台に二度と戻れない事を覚悟するどころ



奥羽越境現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出だし演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

か、庄内の家族すら北海道までの避難を考えた程だった。

そして今、どうなったのだろうか？わからない。札幌の人々は今も、仙台は危ない、と言っているようだ。しかし、私はとにかく仙台に戻り、住んでいる。「絶対絶命の窮地」からは脱したと、皆が思っているようだ。だとすれば、なぜ仙台は助かったのか？仙台は救われるだけの価値のある場所なのか？とあらためて問われねばならないような気が私はしている。

かつて仙台を東北の都として、東北の自治独立の夢を語った野田一夫氏はどうに仙台を離れ、東北人の新たな誇りの拠所と言える『東北学』を牽引した赤坂憲雄氏も東京へ戻った。「東北は人口が激減していく。もうどうしようもない事だ。」身も蓋もない事を仰る。しかし偉大な先人がいかに失望しようとも、地に足をつけた人間は諦める訳にはいかないのだ。仙台のような二流の都市に何ができるか―そんな声が聞こえる。一体、仙台とは何なのだろうか。東京的・中央的日本の力の行使に東北が対峙する時、仙台は本当に無力なのか。ここで今一度、

大東京と仙台の鼻と鼻を突き合わせ、敢えて勝ち目のない戦の行方を見つめてみたい。

◇ 仙台と、東京。この因縁の関係について。この両者、実は都市としてはほとんど同時代に生まれた、云わば同級生の都市である。私はよく、東京を国民的漫画『ドラえもん』の登場人物ジャイアンに、仙台をのび太に例える。(ふざけているのはありません)

徳川家康が、拠点である江戸に幕府を開いた時点で、江戸東京はジャイアンとなる運命であった。列島の都市も地域もジャイアン江戸にひれ伏すが、江戸には一人、気の休まらぬ存在が。天下取りの代わりに伊達政宗が築いた、奥州の都市・仙台である。決して大きな町ではなく、そもそも古からの蝦夷の地、政宗自身が秀吉、家康通じてさんざん煮え湯を飲まされ押さえ込まれた云わば敗者であった。しかしよく知られているように、政宗はそうして策を弄して力を削がねばならぬ程厄介な、油断のならぬ男だったのだ。弱者と侮れば、思いがけぬ才覚

で何をかすかかわからない。まさに勉強も運動もダメなくせに早撃ちの天才だったりのび太そのものだ。因みにのび太には恐るべき懐刀・ドラえもんが控える訳だが、仙台にとつてのドラえもん即ち周囲を

包む無限の空間・東北は、まだ押入れに眠っていた。ところで、長きに渡る徳川治世の中、ジャイアンとのび太はいつしかあなあの関係になつてしまふ。その隙を突いて、薩長という

策謀のクラスメイト達が手を組み、ジャイアンの座を奪って、新たにのび太仙臺にとつての脅威となるのである。新生ジャイアン東京にとつても、のび太「仙台」は一目置くべき存在であった。それを示すのが、仙台「青葉城」天主台に鎮座する「宮城懸護国神社」の存在である。本来、政宗が築いたこの城には彼自身が神として祀られていたが、

新政府は政宗の社を町の北部に移させ、帝国支配を象徴するかのよう軍施設をここに置き、後に、護国社を据えた。当社は靖国神社と同様、帝国に命を捧げた人々を英霊として祀るが、戊辰戦争の犠牲となった仙臺藩士の名は、そこにない。仙台には東京・京都に

次いで重要な大学が作られたり、軍事拠点が置かれたりして発展が促されたが、そうして何としてでも帝国の強い管理下に置き、云わば骨抜きにして完全なる「有能な東京の片腕」に仕立て上げる必要があった。のび太仙台を征すれば、ドラえもん東北を手中にし、もろとも手玉にとる事ができる。実際に日本という国は、それをかなりのレベルまで成し遂げたのだ。

相当過激に、仙台は反撃できる

行き着くところまで行き、終戦を迎えた日本は、軍事拠点としての仙台は失った代わりに、支店経済都市として引き続きこの町を、そして東北を骨抜きに続けた。日本がバブル経済に沸いた頃、東京は最も華々しい魅力に輝き、膨大な人々を引き寄せたが、一方で全国の地方と都市、特に日本海側や東北は完全に日陰の存在となる。仙台などはほんの二〇数年前まで「文化不毛の地」と言われ、

何でも中途半端な、魅力に乏しい町とされてきた。しかし、市民のアイディアで街路のケヤキ並木に壮大な電飾がかけられたり、やはり市民によって音楽祭が始められていずれも全国的に知られるようになり、文化発信の拠点となる斬新な建築「メディアテーク」が開館し、更に球団始め各種スポーツ団体が組織されるなど、「バブル崩壊」後

二〇年のうちに仙台は、実はかなり様変わりしたようである。保守的な気風も根強く、支店経済という仙台骨抜き作戦は依然有効の向きはあるが、逆にそれが思わぬ形で仙台復活に作用しつつある。その例に、わず

うになった事があげられよう。その理由としてよく言われるのは、閉塞感に満ちた大情報都市・大消費都市である東京から距離を置く事で感性を解放し、且つ自然と都市の調和の中で創作活動に集中できるという側面である。確かに東京周辺にも良い環境はあり、実際の移住も多いが、私は地方特に東北の人々が、今後いかに東京中心の視点・人

生観から自らを引き剥がせるかが問われていくのではないかと思っている。◇ 「もうこれ以上、東京に人が増えないでほしい」「東京の事を悪く言う奴は出て行けよ」と、もともと江戸東京に住んできた人々によく言うよう

で、確かに尤もな事だ。東京がより自然な「人の住む町」つまり一地方に戻ってゆく事を、元来の東京人は望んでいるのかも知れない。ただ実際には、東京が変わるには思った以上の痛みが伴うはずだ。今後も原子力発電所が必要だと主張するならば直ちに地方ではなく都内に建設すべきだとか、パスポートを所持しない人が多い東北を笑う事もやめて海外より国内を旅して地方を知るべきだとか、課題としたい事はいろいろある。◇ TVドラマなどの舞台や本で紹介される店や場所の大半が首都圏であるのは、

制作会社や出版社の大半が首都圏にあり、予算の都合も考えれば当然と言えるが、問題はそれらがわざわざ全国に発信され続けている事だ。地方の人々に憧れを抱かせ、長年に渡り東京一極集中促進の一翼を担ってきた訳で、決して侮れない側面である。首都圏は集まってくる人々を、その内包した憧れのイメージごと飲み込みながら、変化し膨張してきたのではなかったろうか。

◇ だとすれば、地方に拠点を置く作家たちが、例えば積極的に地元や地方都市を舞台にした物語を広く発信する事で、それだけで大きな「反撃」になり得る事が想像できるだろう。

しかし本当に、地方、東北に、若者たちを引き寄せせるドラマがあるのか？東北一を謳う大都市・仙台からして、ここには新宿や渋谷のような混沌の魅力に乏しく退屈だ、という人がいて、仙台で催された小説などの講座で、学生の書いた作品の舞台が浅草だった、という話もある。作家の卵自身が、地元にはドラマがない、と思いつく様は、まさに東京一極集中の結果であり、もはや心の病の感ずらある。まさにのび太がジャイアンにやられたつばなしの状況が長引いているのだ

◇ あの激震が始まる一連の災害によって、若者が減り、過疎の進んだ多くの地域が更に打撃を受け、もはや東北は風前の灯かという声もあちこちで上がった。ところが、「ここを離れたくない」「必ず戻ってこよう」「この町のために働きたい」という、絶望に反する声若者たちの口から聞こえる。◇ 気のせいかもしれないが、首都圏や他地域からも、被災地に生き甲斐を見出してやってくる人々の姿がある。自分の物語(ドラマ)が、ここにこそある。その事に、皆が気づき始めたという事なのか。

◇ 考えてみると私も六年前、一〇数年住んだ東京が退屈になったと言つて、仙台へやつてきたのだ。仙台一見不思議な話だが、東京では様々な出会いや出来事があった。大抵自分とは無関係な所で起こり、通り過ぎてゆく感が強かった。つまり自分が東京には無意味な存在に思えてしまう事が多かった訳だが、仙台では出会いや出来事が、身近に、自分に関わりある事として感じられる点が違つていた。仙台では店がひとつ消えれば、その町、地域にとつて大きな損失となる。あらゆる存在が貴重に感じられ、それ故か、店や場所の一つ一つ、人物の一人一人の放つ存在感、エネルギーが強く感じられるのだ。

◇ どうしても話が居住地の仙台の事になるので、東北中から今度は仙台一極集中か、と叩かれる気がするが、私はむしろ仙台一極集中中などという事があるのなら是非一度見てみたいものだ、と思つている。仙台在住者としてではなく、山形県庄内地方の人間として、やれるものならやってみろ、と思つた。既に嫌という程恒常化し、東北に何のメリットもない東京一極集中より、よほど面白みのある話ではないか。一旦仙台に諸々が集まったとしても、東北圏内の事ならば後々皆で変えていく事もできるだろう。

◇ 何しろ、のび太仙台なのである。思いがけぬ才能を発揮して、何をかすかわからない。これからはジャイアン東京を脅かす、因縁の逸材なのだ。

◇ もちろん、物語のタイトルは『ドラえもん』。今ようやく押入れから起き出した、私たち東北の各地域、その一人一人が主人公である。

◇ 何しろ、のび太仙台なのである。思いがけぬ才能を発揮して、何をかすかわからない。これからはジャイアン東京を脅かす、因縁の逸材なのだ。

シリーズ 東北大震災と 宗教を考える 神道—伊勢神宮

心の復興はこれから

3・11からもうすぐ2年を迎える。復興事業は話題になるが、精神面での復興はあまり話題に上ることもない。いまどういう状況にあるのだろうか。

震災直後の被災地と被災者は混乱の極みにあり、日々を生き抜くだけだった。その後、被災地は落ち着きを取り戻したが、それで遺族や親戚たちの気持ち、被災者の気持ちに区切りが付き、精神的に平常な状況に戻りつつあるとはとても言えない状況である



伊勢神宮 内宮 正宮

思う。生存のための最小限の状況が確保された後、残された家族は、なぜ犠牲者を助けることが出来なかったのか、なぜ最初から高台にいなかったのか、なぜこんな被災に直面しなければならなかったのか、何か自分に悪いことがあったからこんな目にあうのだろうかと思

自分を責めるかもしれない。亡くなった方の遺影を見るたびに、けじめのつけようもない自分をどうすることも出来ないだろう。いったいどうすれば犠牲者を慰めることが出来るのか、また残された遺族や被災者の気持ちが落ち着くのだろうか。この問題ほど大きな問題である。苦しみ、悲しみ、怒り、後悔さまざまな感情が入り混じった悶々とした気持ちが体内で張り裂けんばかりに膨張し、心のなかで暴れまわり、一向に静まる気配がないだろう。対外的にはその気持ちを無理やり押し殺し、平

静を装っているだけだろう。何とかその苦しみを克服しようともがいても未だに脱出できてはいないに違いない。

通常範囲の悲しみならば、時間経過とともに癒えるはずだが、この被災ショックから抜け出すにはもつと別のルートが必要のようだ。

災害と科学技術と慢心

もともと日本は自然災害の多いところである。地震や津波ばかりでなく、台風、洪水、土砂崩れ、かんばつ、火山噴火など、さまざまな災害があった。そして東北にはかつて、冷害があり、飢饉が加わる。

たまたまこの百年間に、人知を超える規模の災害がなかったために、それらを忘れていたようにも思う。他方、人間の英知、科学技術の進歩で自然災害を克服しつつあるという錯覚もあったかもしれない。実態は単に発生しなかっただけ

であり、克服した訳ではなかったのだから。

宗教は問われている

日本の宗教は被災者の苦悶と問いかけに十分に応えられているだろうか。日本に存在するあらゆる宗教はこの課題を素通りすることは出来ない。真正面から受け止め、「答え」を出さなければならぬ。遺族だけでなく、あの津波を体験し、あの映像を見たいすべ

この上に重くのしかかる原発放射能汚染問題も含めてである。また、日本は無宗教の国と言われてきた。3・11後もそうしたことをまじめに言えるだろうか。宗教はいまこそ求められていると思う。「宗教」を軽視し続けてきたツケをここで清算する必要があるとも思う。

歴史をくぐり抜け、いま存在している宗教は、数百年に一度の割合で襲ってきた大災害に対しても、人々

に「答え」を提供してきたはずである。だから残っているし、信仰されてきた。だから今回も同じだろう。

伊勢神宮参拝

日本古来の宗教といえ、まずは神道である。そのなかでも頂点に位置するのが伊勢神宮である。ここを参拝せずして、わずかも神道を語ることはできない。そう考え、初詣の混雑も一段落した一月中旬に伊勢神宮に参拝した。

まずは、あまり参拝する人がいないだろうと思われる伊勢宮から開始した。内宮や外宮から大分離れた志摩にある。確かにだれも参拝者がいない。でもどうしてここに参拝してみたかったのだ。次に順番通り、外宮、内宮とお参りした。

鬱そうとした森があり、巨木があり、川が流れている。自然に囲まれ、自然のなかに存在する宮、別宮である。とにかく広い。とりわけ内宮の広さは格別だ。

神道の神とは

お参りしながら、先ほどの問いを考え続ける。神道の神さまは神殿のなかに存在するが、見ることはできない。仏教のように形ある仏像を拜む訳ではない。神を前にして穢れない状態に戻る。心穏やかに透明になる。さまざまな迷いや欲望を断ち切り、歪みが入り込む隙間を埋め、結果、邪悪な災いを防ぎ、神の御心のままに生きていくことを誓う。ただ単に一心不乱に一生懸命に努力する。その先のことは神さまにお任せする。そうした心情的になりつつ参拝した。

そして以前読んだ本を思い出した。「神からの道」がまずある。それは永遠の宇宙的創造行為で、神道ではそれを「ムスビ(産霊)」の神あるいは力ととらえ、そのムスビの力の発現のプロセスの中に過去・現在・未来があると考えてきた。存在の流れであり、万物の歴史である。それが神話や伝承として伝えられてきた。

もうひとつの「神への道」とは、その与えられたすべてのものに対して心から感謝し、畏敬し、返礼する。それが祈りや祭りとなる。これが神道による答えなのかもしれない。

しかし、これらは今回の大震災を含めてのことであり、その境地に辿りつくには大きな努力を要することもまた確かである。



御手洗場



五十鈴川



宇治橋



蘇民将来飾り



内宮を囲む森の一部



遷宮館

笑い仏 福島への行脚 第六回

奈良の名刹元興寺 辻村泰善住職のお話

真言律宗の宗派全体 で福島県いわき市を 中心に支援実施



元興寺に逗留中の笑い仏

誕生地である鳥取から行脚を続けながら、縁のあるお寺に逗留させてもらい、福島の地を一步一歩目指す「笑い仏」さんこと「がれき光背仏」（釈迦如来）。その旅程をお世話する我々MONKフォーラムが、仏さんを仲立ちに道中で頂戴した出会いを書き綴るのが、このコラムの趣旨です。今回は、逗留中の世界遺産でもある名刹元興寺の辻村泰善住職のお話です。年末のお忙しいときにありがたく会合の機会を頂きましたので、そのインタビューをまとめました。（文責・モラ坊円瓢）

MONK：笑い仏さんの逗留をご許可いただいた経緯についてお話しくださいませんか？

「笑い仏さんを当寺に招いたのはいくつかのきっかけがありました。まず一つは、皆さんもご存知かと思いますが、元興寺の受付をしてらっしゃる方が竜門仏師と旧いお知り合いで、元興寺文化財研究所事務局長の江島さんをつないで下さった。すぐに事務局長が理事長で住職でもある私のところにお話をもってきて下さり、二つ返事で引き受けた、という訳です。」

「あ、未曽有の大震災直後から、我々も、もちろん様々な支援をさせて頂いております。お寺の至るところに置かれた義捐金の箱に頂戴したご浄財を遅延なく東北に届けておりますし、真言律宗の総本山である西大寺でも連日欠かさずにご祈禱を行いました。しかし、間接的にはなく、『直接われわれが届けることができる』何かがあればなあ、と常々思っております。そこに、皆さんから笑い仏さんのお話を頂戴したので、笑みをたたえた仏様が、ひとつひとつのお寺を丁寧に行脚され、周囲の方々とご縁をつなぎ、その善意の心を福島まで届けるという活動にとても感心いたしました。このような活動に当寺が関われることは、大きな喜びです。」

「えらに言えば、竜門仏師のお師匠さまは、昭和の大仏師」と呼ばれた松久琳さんですが、彼の内弟子に今村九十九さんという著名な仏師さんがおられます。この今村仏師と当寺とは非常に懇意な仲でして、竜門仏師のことをお聞きしたときは驚きました。この点でも、大きな縁を感じております。」

MONK：東北・福島への支援は、元興寺だけではなく宗派（真言律宗）としてもなされていきますか？

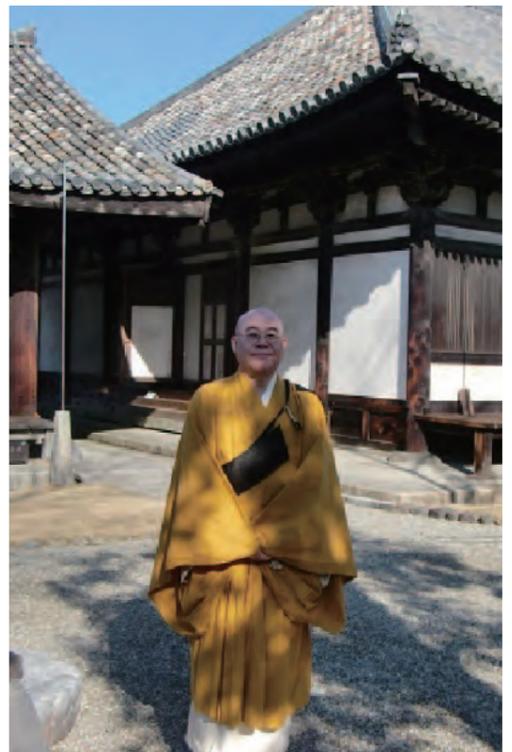
「はい。実は、東北の中でも特に福島に、いわき市などを中心に、真言律宗の末寺が固まって存在して

います。我々の宗派には、鎌倉時代に全国を布教して民衆に広く教えを説き、西大寺の復興にも功績があり、鎌倉で北条氏の篤い信頼を得た忍性という高僧がおられます。彼が奥州への布教の足がかりとしたのが、福島県いわき市だったのです。この当時の日本にとって、奥州は『北限』でありましたから、忍性さんがいかに布教の意志の強い方であったかが分かります。」

MONK：ご住職も福島を中心に支援活動に回られたとお聞きしていますが、現地の印象は？

「復興の進んだ地域とそうでない地域との差がとても大きいという印象を持ちました。細かいこと言いますが、確かに義捐金や政府からの給付金などが、そこで暮らす皆さんに届くことはとても大事なのですが、それ以上に、『仕事がない』という現状が、勤勉な暮らしを営んでこられた皆さんには非常に大きな重荷としてのしかかっているように感じました。そうした『いきがい』を復興するという視点なくしては、皆さんのお顔に本当の意味で笑みが戻ってくることはなかなか難しいのでは、と感じております。」

「それと、やはり原発の問題は復興にも大きな影を



元興寺ご住職の辻村泰善老師

落としているのだな、と感じました。臨済宗のお坊さんで芥川賞作家でもある玄侑宗久さんという有名な方がおられますが、彼が音頭をとり、住職を務める福聚寺のある三春町のコミュニティの人々にガイガーカウンターをいち早く持たせるといふ活動がありまして、私が尋ねた場所でも多くの方がそれを持ちながら色々な箇所測定をされている場面には遭遇しましたが、皆さんからはただならぬ緊張感を感じ取りました。『まだ終っていないのだな』という印象を強く持ちました。」

MONK：今後の東北へのお寺からの支援のあり方は、どのようなものになるとお考えですか？

「先ほども申し上げましたが、被災地には『お金や物資を届ける』支援と並行して、『生活や仕事を復興させる』という、より地に

足の着いた支援のあり方が求められる時期に来ているのではないかと考えています。例えば、東北はお酒も海産物もお菓子も、伝統的に美味しいものがたくさんあります。そうしたものを被災地から離れた我々が積極的に購入することで、現地の商いを復興させ、少しでもお仕事を作り出すきっかけになればよいですね。お寺としても、常に意識していこうと考えています。」

「また、宗派の中でも、寺々が独自に復興支援の名目でいろいろな活動を展開しているのを見聞しています。そういう動きを単発で終わらせず、今後は宗派としてより組織だった活動にまとめて行くことも考えればよいのではないかと考えています。」

MONK：今日は年末のお忙しい中、貴重なお時間を有難うございました。

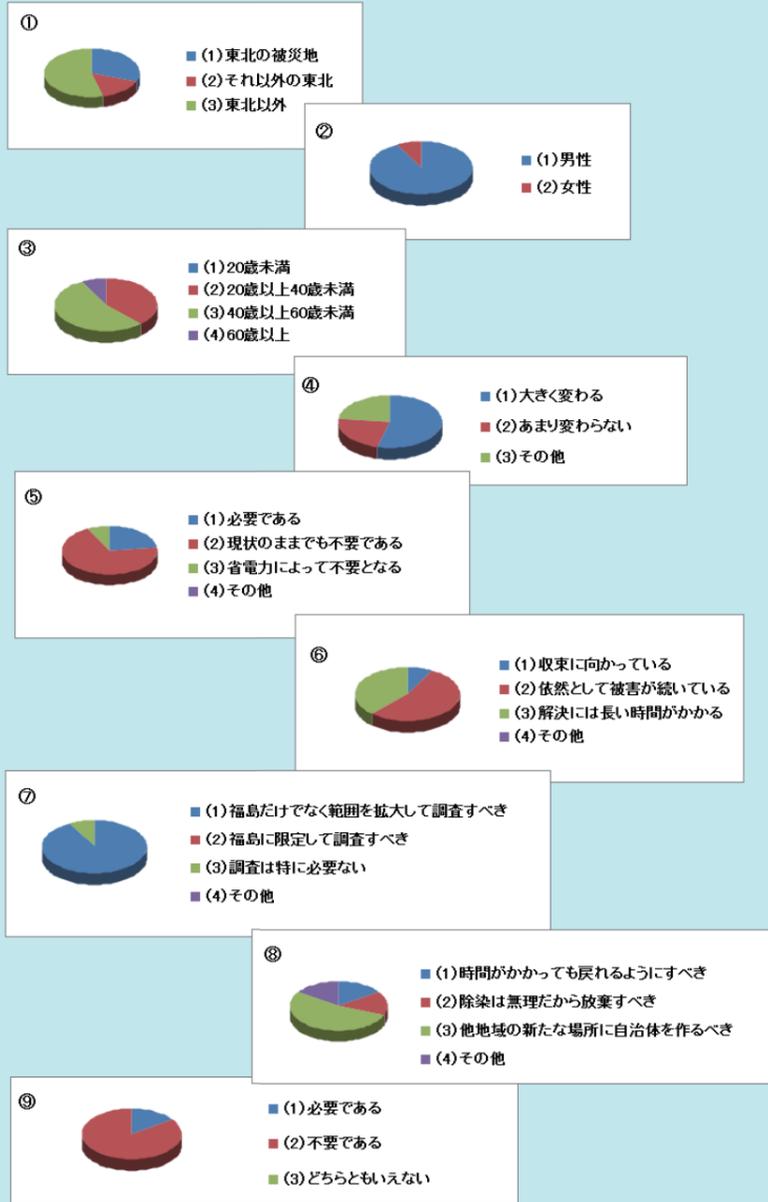
「ご住職とお会いした日は、奇しくも我がMONKフォーラムの公式の一〇周年記念日でした。年末のお忙しい中、二時間近くもお話しできたことは、我々MONK衆にとっても大きな節目のプレゼントになりました。ご住職からは、真言律宗の教義についても丁寧にご教えて頂き、我々の質問にも気さくに答えて頂いたのですが、その内容を書くにはささか紙幅が限られます。よって、今回は笑い仏さんに直接関係のある内容だけに絞らせて頂きました。ご了承ください。」

「笑い仏」さまは目下、元興寺に逗留しておられます。道中の詳しい模様は、公式サイト：<http://www.monk-forum.org> にご覧下さいませ。
(モラ坊円瓢)

第8号 ネットアンケート集計結果

【 東北の原発政策について 】

No.	質問と選択肢	回答数
①	現在住んでいる場所	
	(1) 東北の被災地	4
	(2) それ以外の東北	2
	(3) 東北以外	7
②	性別	
	(1) 男性	12
	(2) 女性	1
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
	(2) 20歳以上40歳未満	5
	(3) 40歳以上60歳未満	7
	(4) 60歳以上	1
④	原発政策は前政権と大きく変わるか?	
	(1) 大きく変わる	7
	(2) あまり変わらない	3
	(3) その他	3
⑤	原発再稼働なしには電力供給に問題が起きる?	
	(1) 必要である	3
	(2) 現状のままでも不要である	9
	(3) 省電力によって不要となる	1
	(4) その他	0
⑥	東北の放射能汚染の風評被害について	
	(1) 収束に向かっている	1
	(2) 依然として被害が続いている	7
	(3) 解決には長い時間がかかる	5
	(4) その他	0
⑦	東北での人体への放射能汚染被害調査について	
	(1) 福島だけでなく範囲を拡大して調査すべき	12
	(2) 福島に限定して調査すべき	0
	(3) 調査は特に必要ない	1
	(4) その他	0
⑧	福島の避難指示区域と警戒区域の帰還問題について	
	(1) 時間がかかっても戻れるようにすべき	2
	(2) 除染は無理だから放棄すべき	2
	(3) 他地域の新たな場所に自治体を作るべき	7
	(4) その他	2
⑨	東北に原発は必要か?	
	(1) 必要である	2
	(2) 不要である	11
	(3) どちらともいえない	0



今回は、安倍政権に変わって、国の原発政策、特に東北の原発に関する政策がどう変わるかというアンケートであり、十三名の回答があった。

まず、政権交代で原発政策が大きく変わると回答したのが、約五四％。原発再稼働なしで電力供給に問題が起きるかという問いには、六九％が省力化などしなくとも、いまのままでも不要だと回答。東北の放射能汚染の風評被害については、約五四％がまだ続いている、約三八％が解決には長い時間がかかることと回答した。東北での人体への放射能汚染被害調査の必要性について聞いたが、約九二％という圧倒的多数が、福島だけでなく範囲を拡大して調査すべきと回答。

これは行政などの公的な発表に対する不信と、放射能汚染被害について不安な状態にあることの表明かもしれない。

福島の避難指示区域と警戒区域の帰還問題については、他地域の新たな場所に自治体を作るべきという回答が約五四％であった。最後は、総合的に判断して、東北に原発が必要かどうかについて聞いた。約八五％が不要と回答。

原発再稼働反対という国民のコンセンサスは、東北に関しても同じだと思うが、原発への拒絶感は一層根強いかもしれない。

編集後記

今月号の記事は宗教関連が多かった。筆者が担当したのは伊勢神宮と郷里の鏡峯寺である。それ以外に「笑い仏」がある。たまたまのことである。かつて復興から信心へと新聞の路線を変更した訳ではない。

むかし筆者は信心とは縁遠かった。しかし年令を重ねるにしたがって神社仏閣にお参りする機会が多くなった。しかもかつての不信心を取り戻すべく、手当たり次第という感じである。そうしたお参りの際にいろいろ考えることがあった。まずは、普段はそうした神社仏閣の奥深い成り立ち、思想などほとんど知らずにいたという反省である。

神道の根本原理を聞かれて即座に答えられる人は非常に少ないだろう。また、郷里の神社仏閣について深く知る人は少ないだろう。

しかし少し調べてみるだけでもすごく面白い。ワクワクする世界が広がる。なぜいままで調べようとしなかったのだろうと後悔した。信心という次元でなくとも、少なくともどんな世界なのかは調べてみる価値は十分にある。

まずは足元から調べ始め、何かを外に向かって発信すると、それに共鳴するネットワークも広がる。そしてさらに世界は深まっていくと思うのである。



『東北独立』 砂越豊 著
価格：1,260（税込み）

時間が経過すればするほど『東北独立』という選択肢がより現実的になってくる



『東北独立』 砂越豊 著
河北新報広告掲載
2012.2.12
2012.3.13

あなたの著者制作、お手伝い致します！
電子新聞発行のお手伝いを致します！
お気軽にご相談ください。



『立ち上げられ、オジサン！』
砂越豊 著



『もうひとつの構造改革』
砂越豊 著

※電子新聞創刊特別値引

上記2冊ともに 1260円⇒500円（税込）

遊無有出版

検索

遊無有出版
YUMUYU Publishing

立川事業所 042-512-9833
本社 042-562-3507

立川事業所 yumuyu@wj8.so-net.ne.jp
本社 contact@yumuyu.com